

保険薬局におけるプレアボイド事例の薬剤別傾向

原井 厚子¹⁾、浅野 恭平¹⁾、田村 真唯²⁾、安藤 陽子¹⁾、佐藤 展宏³⁾、浅井 宏昭³⁾、長屋 弥生³⁾、長尾 久義³⁾、前田 守⁴⁾、長谷川 佳孝⁴⁾、月岡 良太⁴⁾、森澤 あずさ⁴⁾、大石 美也⁴⁾

- 1) 株式会社アインファーマシーズ アイン薬局 富山大学病院前店
- 2) 株式会社アインファーマシーズ アイン薬局 上堀店
- 3) 株式会社アインファーマシーズ
- 4) 株式会社アインホールディングス

【目的】プレアボイドは、薬剤師の薬学的介入により効果的な薬物治療の実現や副作用の回避に貢献した事例である。その発生事例を収集、分析することは、薬学的介入の現状を把握し、有用な情報の抽出につながる可能性がある。そこで、当薬局のプレアボイド事例を収集し、対象薬剤という視点から分析し、その情報の有用性を考察した。

【方法】2016年12月～2018年4月に、当薬局の薬剤師が社内イントラネットにて報告したプレアボイド事例616件を17種類のカテゴリー(用法用量、患者情報不足、重複投与、処方日数、処方欠落、副作用発見、処方確認、薬剤情報、他剤投与、副作用あり、過量投与、禁忌、規格違い、健康相談、併用注意、慎重投与、その他)に分類し、対象薬剤と処方変更の有無を集計した。対象薬剤はYJコード3桁を用いて薬効で分類した。

【結果】全事例のカテゴリー件数は「用法用量」が188件(28.7%)と最も多く、次いで「患者情報不足」が58件(8.8%)であった。対象薬剤は、薬効分類で「解熱鎮痛消炎剤」が36件(5.8%)と最も多く、次いで「精神神経用剤」が31件(5.0%)であった。薬効分類ごとのカテゴリー件数は、「解熱鎮痛剤」では「用法用量」が9件(25.0%)と最も多く、「精神神経用剤」は「副作用発見」が9件(29.0%)と最も多かった。全事例の処方変更率は78.7%(485件)であり、薬効分類で大きな差は見られなかった。

【考察】本研究から、対象薬剤の違いでプレアボイドのカテゴリーが異なるが、処方変更には関連しない可能性が示唆された。種々の症状にあわせて処方される解熱鎮痛消炎剤は「用量用法」が、薬理的に副作用が発現しやすい精神神経用剤では「副作用発見」が多くなったと考えられた。以上から、薬剤ごとのプレアボイドの傾向を把握することで、処方ごとに注意すべき点が明確となり、効果的な薬物治療の実現や安全性の確保に向けて保険薬剤師が薬学的介入を行う一助となる可能性が示唆された。

(第12回日本薬局学会学術総会(2018年11月, 名古屋)にて発表)